琉球大学学術リポジトリ

アクティブラーニングを超える実践事例：講義で班を使うことによる、教えを超える学びの共同化

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター
	公開日: 2016-10-24
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 丹野, 清彦, Tanno, Kiyohiko
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/35632

アクティブラーニングを超える実践事例

講義で班を使うことによる、教えを超える学びの共同化

丹野　清彦*

Be beyond Active Learning
Practical cases
Cooperation of learning beyond teaching by using group in my lecture .

Kiyohiko　Tanno *

学生と共同してつくる大学での授業のあり方について考察した。一方的に講義をするのではなく、班を使い、学生が楽しく主体的に参加するには、どのように講義を構想し、学びを展開したらよいのだろう。そこで、私は班を使いグループ活動やワークショップを取り入れることを考えた。

しかし、班にはどのような使い方があり、班を使うことによって授業や学生にはどのような変化が生まれるのであろうか。追究することにした。

1　班の持つ意味と役割をまとめる
2　講義でいくつかのパターンで班を使い、学生同士の距離を縮め、人間関係をつくる
3　班を使うと比較し検討する過程で、教えなくても理解する
4　班で自分が発言し、人間関係ができてくると、自分を語り発言の質が変わる

ことを仮説としてたてた。

授業を通して学びの集団をつくる観点から、班を使い講義を展開すれば、教えを超える学びの共同化が図れるのではないかと考え、班の使い方を変化させ学生の姿や感想をもとに私が実践してきたことを実践事例としてまとめることにした。

1　はじめに

昨年の春に琉球大学にやってきた。それまでは小学校に勤務していた。小学校では班をつくり、班を使った活動を通して子どもたちに人との関わり方や関わることの大切さを教えてきた。しかし、大学で働くことになった時、どのように講義を構想すればよいのか、戸惑った。

ちょうどその時、大学の新採用者を対象とした研修会で「一方的な講義にならないように必ず班を使ってアクティブラーニングを」と話され、私が今までやってきたことが大学でもできるかもしれないと考えた。

2　大学の講義で班をつくろう

（1）講義を観察する

そこで、まず半年の間に10人の講義を観察した。

＜A先生＞

50人以上の学生を相手に講義をする。中心は新聞記事や資料をもとにした読み取り、パワーポイントを活用した説明もあり、出てくる資料が新鮮で、学生に感動と驚きを与えていた。初めて出会う世界を提示しているのが特徴。またそのことが好評で、新しい知識、初めて出会う世界をテーマとしていると感じた。班を使う場面はあるが、

* 琉球大学教育学部

出し合う程度の使い方だった。

＜B先生＞

10人ほどの小さな授業で、学生との対話が中心。実際に働く学校の仕組みや考え方を丁寧に指導していた。少人数なので班を使う必要がない。その分、対話によって授業が成り立っており、対話の大切さを改めて感じた。学習集団が小さいと時間はゆっくり流れるという点は、小学校と変わらない。

＜C先生＞

３０人ほどの授業で、最も小学校の学級規模に近く、授業の中で一回は班を使い活動する時間を設けていた。学生を退屈させずにわかりやすい授業をつくろうと工夫した講義パターンだった。しかし、班はその時間だけの班で、授業のためのグループであり、このことから授業を学びと人間関係の両面から捉える小学校的な生活班をイメージして講義を行うとどうなるのか、関心が湧いてきた。

＜D先生＞

９０人もの学生を対象にした授業で、席を指定しその席ごとに班をつくり、班を重視していた。人数が多いから班を使い、集団をまとめているようだった。講義の人数が多くても、班は有効だと感じた。しかし、話し合うための班ではあるものの、人間関係をつくり、新たな考えをつくりだす班という視点でもっと活用する方法はないか、という関心が湧いた。

講義を見て、特徴を整理した。もともとは大学で学生にどのように講義しているのか、授業のあり方に関心を持ち見学した。

私が重要だと感じた要素をまとめると次のようになる。

●大学の授業も規模が違うと、講義の仕方を変える必要がある
●学生が新たな知の世界に出会うには、資料が大切
●学生と講義の中で対話が重要である
●大人数の講義でも班をつくる必要がある
●班を授業の中で使うと学生も楽しそう

このような観察を経て、それぞれの講義の良さを取り入れようと考えながら、私がこれまで追究してきた学びの共同化にそったワークショップ型の授業と、班をつくり活用した授業のあり方を結びつけ、実践することはできないか、と考え班活動の意味、授業との関係を問い直すことの重要性をあらためて感じた。

(2) 班とは何か

では、班とは何であろうか。小学校では、形式的には、どこの学級にも班がある。また、授業においても学習班がつくられ、活用されている。私も、小学校の実践において班をつくり活用してきた。班とは、実践においてなくてはならないものだった。

しかし、班とは何かと問い返されると考え込んでしまう。私にとって班はあるのが普通で、使うものだった。しかしながら、大学では果たして必要か。必要であれば何のためだろうか。学生の感想を聞きながら、整理することの重要さを感じた。

そこで，班を学級生活の居場所と捉え、班をつくろうと提案し続けている全国生活指導研究協議会常任委員会著、学級集団づくり入門（1966年）を参考にすると次のように書かれていた。

●班は、係り的小集団のように特定の目的遂行のために組織されたものでなければ、適応的小集団のようにひとりひとりの生徒の個別的指導に専一する手段でもない。班は学級集団の単位組織であると同時に、学級集団の活動目的とのかかわりあいのうえでひとりひとりの班員の生活諸問題にとりくむ同士的組織である。

次にそれに基づき実践し、21世紀に向け若い人を対象にした「はじめての学級づくりシリーズ①　班をつくろう」（大和久勝・丹野清彦編著、2014年）のなかで、班づくりについて大和久勝は、こう定義している。

●子どもの居場所と出番づくりを通して、個人と他者との関係、集団と個人の関係、あり方を学ぶもの。班の指導とは、居場所と出番の指導である。居場所は、安心できる人間関係であり、出番は、授業や学級活動で活躍すること。その安心と自信の中からそれぞれの子どもの自己肯定感が育ち自立していくことができるのです。

それらを受けて、私は班を次のように考える。

●班は子どもたちにとって生活の場であり、小さな社会である。
●この生活の場で、人との関わり方を学ぶ
●班は友だちづくりの練習の場所であり、活動や学習を通して友だちができ、班は居場所となる

※下線は筆者

(3) 講義で班をつくる意味

しかし、はたして大学の講義で班をつくることが重要なのだろうか。確かに小学生段階であれば、班は発達年齢に応じた社会を形成し、人との関わりを学ぶために意味があるだろう。

だが、大学生となるとどうだろうか。学生は、人との関わり方や交わり方を学んでいるとしたら、講義で班を使う意味は、小学生のそれとは異なるのではないか、ということである。

しかし、ここに陥りやすい仕掛けがある。それは、2つの点からだ。ひとつは大学生は、人との関わり方を学んでいる。だから友だちづくりはできている、と考えて良いのかということ。

もうひとつは、他人と共同して学ぶ楽しさは、小学生には重要だが、大学生や大人には必要ないのか、ということである。

まず、関わり方についてである。講義というものを知識の伝達であり注入と考えれば、人と関わる場面はいらないだろう。しかし、知識を獲得するサポートととらえれば、その道筋において他者と関わり共同し発見していくことは、知識の生まれた歴史をたどり、立体感のある体験的な知識を得ることになる。

また、その過程において学生の場合も、講義で学ぼうとする者たちの人間関係はできているとは限らない。講義を受ける人たちは、人間関係があるから講義を希望するのではなく、実際には単位を得るために受講するからである。そこに集まる人たちは、知らないもの同士であり、これまでの学校のクラスとは性格が異なる。そのため、横のつながりである人間関係はできていないと考える方がよく、授業をしながら学生相互の横のつながりをつくり、学びの集団をつくることを意識する必要がある。この集団ができてくれば、次の変化が起こるはずである。

① 学生の発言内容が変化する
② 発言するメンバーが入れ替わり増える
③ 講義の雰囲気が緊張から暖かい雰囲気へ変わる

このような変化が起こるのは、一般的には講義になれ、集団になれ安心感が生まれるからである。なれるとは、見知らぬ関係から知り合いへと変わり、その親しみが発言する安心感を生むことであり、一定の人間関係が雰囲気を変えるのである。このなれることを加速させ、ある方向へと意図的に導くために班をつくるのである。班をつくり学習する意味は、講義に集まった見知らぬ人たちが、学びの共同的な集団へと変わることを意図しているのである。

(4) 班をいつ使うのか

では、班をいつ使うのだろうか。先に出版した拙著「ドタバタ授業を板書で変える」（溝部清彦著、2014年）では授業を時間の流れによって、

●授業のはじまり・・はじめの10分
●授業の中盤・・・・ひとつめの問い10分
●授業の山場・・・・クライマックス問20分
●まとめ・・・・・・終わりの5分

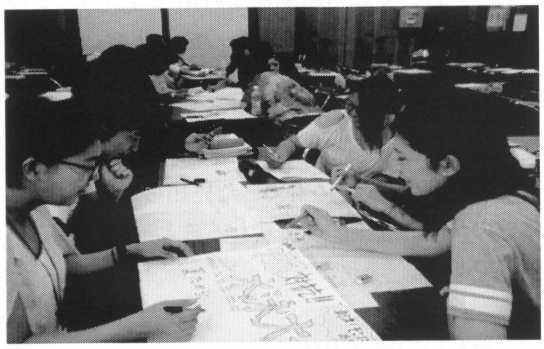
と分けた。大学でも講義の構想を同じにして取り組んだ。そこで班をいつ使うのか、次の資料を使い説明する。

① 次の写真は、講義のはじまりの場面である。

【写真２－１】

授業のはじまり。簡単に今日の講義のテーマを説明したあとにテキストを班内で句読点ごとに交代し輪読してもらう。学生たちからは、小学生に戻ったみたいでおもしろいと好評。出だしの重たいムードが一変する。

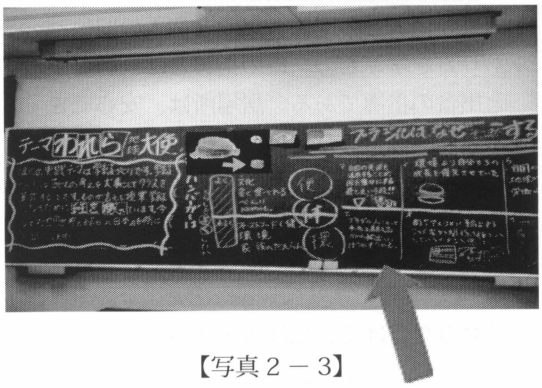
② 続いて講義の中盤の場面である。



【写真２－２】

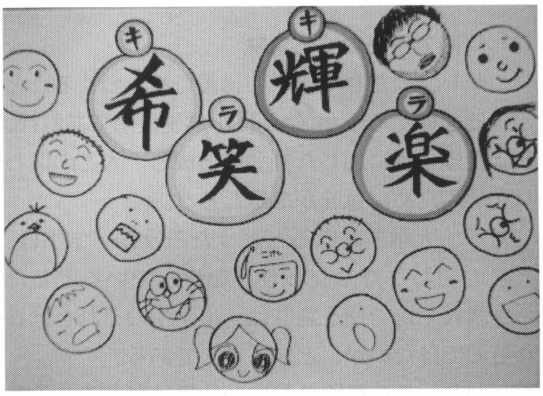
授業の中頃、20分ほどすぎで班を使った場面。あるところまで説明し、そこまで話した内容をまとめ、キーワードにして発表してもらうために班で話し合っている。聞くだけでは眠くなるので変化をつける。

③ さらに講義の山場の板書である。



【写真２－３】

授業の山場、上の板書では、矢印付近の枠で囲まれたところが、班で話し合い、代表が書いたところである。山場なので、講義開始から６０分前後の時間帯である。学生は板書に参加するため、いつもと違う緊張を持ちながら他者との比較を行っていた。



【写真２－４】

授業のまとめ。講義で学級の個性が出るような教室のインテリアについて話し画像を見せた。
そこで、あなたならどんな教室の前面をつくるか考え、班でひとつにまとめてもらった。これは、キラキラという文字に漢字をうまく当て工夫したと発表していた。

このように講義を分けて考え、班を４つの時間帯で活用した。

(5) 班をつかうポイント

時間帯を４つに分け、班を使うことを行った。では、班をつかうポイントは、なんだろうか。どう活用すると、学びは広がりを見せるのだろう。

ここでは、班を使うポイントに弱点から迫ってみたい。私は、小学校で班を使い学習している中で、学習班をいつも使ってきた。すると、きまって気になることがある。また、授業を公開する中で、指摘されたことでもあった。

それは、おとなしい子が積極的な子の意見に対して発言できない、あるいは積極的な子に任せる、頼るということである。

この点から、同様のことが大学生でも起きるのだろうかと迷った。そこで試すことにした。５回目までの講義では学習班を早い時間帯から使い、あまり個人の時間を取らずに考えを出し合う場面を繰り返した。その結果、学生の感想に自分の意見が出しにくい、採用されないという嘆きのような感想が２人から書かれた。

私は、この感想を自分の意見を受け入れてほしい、意見を受けとめてほしいという要求だと読みかえた。積極的に参加している証拠であり、否定的な表現の中に要求が隠れている。そこで、これまでのやり方を修正することにした。

私の講義は、８つの専攻生を対象にしており、３学年にわたり受講できる。６割が沖縄出身者である。積極的な人もいるが、自分を出すのが苦手という人も３割いた。学生相互の関係性が成り立っていないことも見えてきた。

そこで、個人で考える時間を長く取り、考えを紙に書く時間を十分に取ることにした。自分の考えを持つ時間をたっぷり保障したのである。

そして、講義のはじめにちょっとしたゲームやお互いを知り合うデモンストレーションを取り入れ、学生相互の関係をつくることを意識した。すると学生の動きに変化が起こり、先の感想を書いた学生も、再び班活動を楽しむようになった。班は使えばいいのではなく、そこには、

> 個人で考える時間をたっぷりとる
> 人間関係ができるほど発言できる

二つのポイントがあることがわかった。

3　班を使った学びの共同化・実践例

(1) 講義をつくる班の発展

それでは具体的にどのように講義で班を使ったか、実践例を紹介し、その意義をまとめることにする。

まず、講義の流れは次のとおりである。

① 今日のテーマをホワイトボードに書き、テキストを読む （約 10 分）
② テキストに書いていることを補足説明する （約 20 分）
③ 個人で考え、資料に書き込む （約５分）
④ グループで考えを出し合う （約 10 分）
⑤ すべてのグループか、一部のグループが発表する （25 分）
⑥ まとめの説明をし、講義の感想を書く（20 分）

この流れを基本とし、講義を構成することにした。個人で考え資料に書きこんでもらう。そのあとに班を使った活動を取り入れる。

ここでは、

① 班でゲームを行い、仲良くなる段階
② 考えを交流し、ほめ合い、認める段階
② 互いの考えをひとつにまとめる段階
③ おもに個人で考え発言する段階

の４つのステップに、班活動を発展させようと構想した。

班を使うのは、自分の考えを持ち、他者と交流するためである。そのために班を使ってコミュニケーションスキルも鍛え、人間関係をつくる。そして、自分の考えを太らせ深め、最後は個人に戻ろうと考えたのである。

(2) 班で経験を出し、交流する

では、実際の講義はどう展開したのであろうか。テキストを読み、実践例を学生は知識として知った。この状況では、実践例がテレビ番組か、本の中の話であり他人事である。

そこで、自分の経験と照らし合わせて考える場面をつくりだしたい。とりわけ、講義の初回から数回は、学生の意識が自分参加の講義だとは思っていないからである。

はじめは、私の実践をまとめたテキストから、

係り活動の場面を取り出し、子どもたちの話をした。ここで、クラスの係り活動は、どうやって決めたか、どんな係りがあったのか、説明した。黒板係りがあったとか、飾り係りや遊び係りがあったとかである。そういった実践には書かれていなかったまわりの状況を補足説明する。そして、

> あなたの子どもの頃の学級には、
> どんな係りがありましたか

と、問うことにした。これなら経験から答えればいい。だれにでも発言するチャンスはある。また、どれも正解である。人はモノを考えるとき、必ず自分の過去の経験を引き出し、ものさしにして比較する。また、そう考えれば良いと考え方を暗示する。

経験をグループで交流しはじめると、だんだん声が大きくなった。どうしてだろうか。自分の経験とは違う学校があることに、学生たちは気づき、驚きの声を上げたのである。この気づきこそ、学びであり発見だと考える。

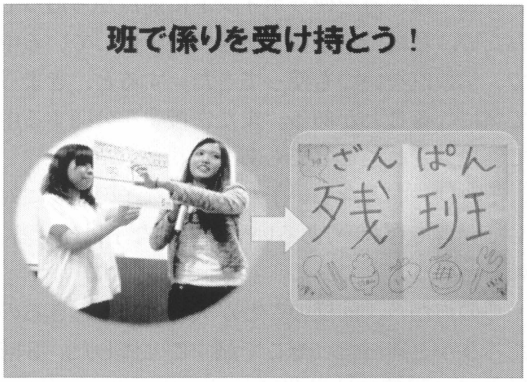
グループワークの特徴は、自分の経験が日本の普通の学校だと思っていた学生に、違う世界があったことに気づかせてくれることである。この発見が、それならこんな学級もつくれるんじゃないか、実践できるのではないか、というしなやかさを生むのである。

実際に学生から出た係りには、つぎのようなものがある。

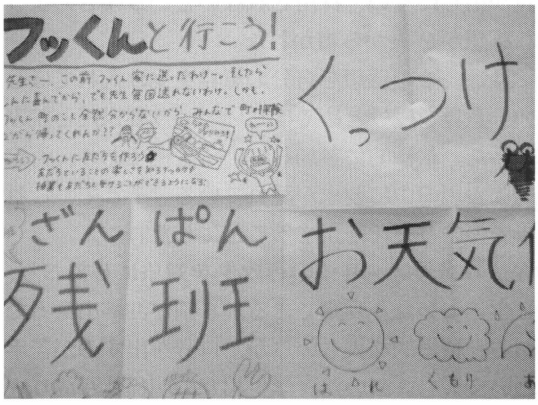
- ●シネマ係り・・・毎週昼休みにビデオを教室で見る
- ●スピーカー係り・声の小さい人の代わりに大きな声を出してくれる
- ●残飯係り・・・・食べられない、残したいという人の分を食べてくれる
- ●くっつけ係り・・ 好きな人とくっつけてほしい
- ●お天気係り・・・あしたは傘がいるかどうか教える係り

係りの発表を通して、ああ、そうか。学校ってこんなこともやっていいんだ。学生からはそんなため息が漏れた。しかし、私が教えたことはきっかけで、学生同士の交流から発展し学んだ結果のため息であり、これこそひとりの学びが班の学びに、班の学びが全体の学びへと共有され、共同化されたといえよう。

◆資料１（発表する場面と紙に書いた考え）



◆資料２（学生の考えた係り）



この講義の後に、どのような感想が学生から出てきたのか紹介する。

◆スピーカー係りがおもしろい。声の大きい子と小さい子は対照的だが、この係りがあったら関わりが持てそうだと思った。その関わりから、声の小さい子が自分の意見を言えるようになったらいいと思う。シネマ係りは、集団にうまく入れない子が、集団に入っていけそうだと思った。

(3) まず自分、そしてキーワードを探す

テキストを読んだ。そのあと私が補足する。そうした時、学生は普通メモをとる。この場面、何をメモしているのか、私は気になった。

考えてみてほしい。90 分の講義をしたところ

で、おぼえていることといえば、「おもしろかった」とか、「ねむかった」ぐらいではないだろうか。それでも中身を教えてといえば、どう答えるのでだろう。

私はここに注目した。メモを取っても見直し、読み直さない限りおぼえられない。だとしたら、人はどう記憶するのか。そう、キーワード。キーワードをおぼえ、そこから紐解くのではないか。

しかし、話の聞き方によっては、キーワード自体を取り違え、こちらの意図するところと違うとらえ方をすることもあり、丁寧に話している時ほど、意図したことが正確に伝わっているのか気になる。

キーワードでまとめるという活動をすることは、学生がどう話を受けとめたのか、知ることができる。また、学生も自分がとらえた内容を他の学生と比べることで的外れなのか、そうでないのか、自ずと知り修正することができる。これこそ私のねらうところだった。

では、そのためにどのような資料を用意すれば良いのだろう。

◆資料３（講義の資料）

＜資料例　講義の資料①＞

意外とヒット　将棋係り

■その時うちのクラスでは

ちょっとみるとだらしないノン太。いつもシャツが出ている。

理屈っぽい米蔵。ふたりは班をつくるとき、一緒になる友だちがいなかった。それで声をかけた。この時から、気にかけていた。　こんなアンテナがけっこう大切です。

■それで将棋クラブ、将棋係りができました。では、どんな子が将棋係りの呼びかけに応えてくるのでしょうか。

■そんな時、がんちゃんが廊下から授業を受けていた。ぼくは、外に出て声をかけました。すると、がんちゃんが将棋をしようといったんです。

さて、大切な力といえばなんでしょう？

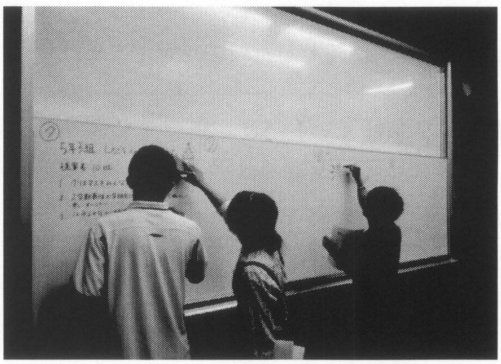
（最後３ますは、ちからが入ります）

資料３のように、クイズ的なキーワード探しを行い、講義のポイントを学生も楽しみながら探るようになった。

その結果、私の述べたいことをどれくらい的確に受けとめているか、あるいは学生はどう受けとったのか等、この活動からわかった。

班を使い、キーワードをまとめ交流する活動を通して、誰かに教えられなくても、他者の発言から学ぶことができる。

他者の発言を聞いて、そういうまとめ方があるのかと考えなおすなど、私が自分の言葉でまとめていれば広がらなかった学びの世界が、そこに生まれた。私の求める学びの世界とは、ソクラテスのような問答（対話）をもとに、自分が知っていることは、ほんの一部だったことに気づき、さらなる学びがはじまることである。



【写真３－１】

キーワードさがしを行った場面での学生の感想である。

◆ずっと先生たちから注意ばっかりされて、自分が暴れている意味や気持ちをわかってもらえなかったんだろうなって思いました。

丹野先生のやさしい言葉に思わず涙を流したのだろうな、と思います。先生は金八先生の言葉を使ったそうですが、大きな言葉だったと思います。

(4) 班で実践の続きを考える

クイズ的に講義の内容をキーワードでまとめ、グループで出し合い繰り返していると、相手は学生。他者とのコミュニケーションの取り方も同時に学ぶ。

ということは、グループ内でどう振る舞えば活動が盛り上がり、円滑に行えるのかを学び、自然と役割分担ができるようになってくる。

グループをつくり、3回目あたりからそういう雰囲気を感じる。きっと学生も同じように感じているはずである。いわば、学級の中に子どもがいて、クラスの雰囲気が優しくなったことを感じ、居心地のよいクラスへと変わる時期を学生も体験し、講義の内容とともに学ぶのである。

この時期は、小学校に例えるとモノが安心して言える時期であり、学生も相手が自分の考えを受けとめ、考えを発言しても良さそうだと思いはじめる。

このような変化を受け、講義の流し方や資料のつくり方を意図的に変える。どのように変えているのか、それは説明を途中でやめ続きを自分で考え、そのあとに再び実践を語るのである。

下記の枠内を見てほしい。フックンという子どもについて、講義をした時のことである。

●フックンは4年生です。低学年の時から落ち着きません。授業では手をあげるからあてると「忘れました」と言います。
あてないと「なんであててくれんの？」と、ふてくされます。おまけに授業のいいところで、椅子から落ちます。必ず盛り上がったところで落ちました（略）

こう説明して、まずフックんの性格や状況について理解を図る。そして、

あなたなら、このあとどう取り組みますか。関わりますか。

と、学生に投げかける。ここでもまず個人で考え、その後グループ討議に移る。その時間を利用して、各グループを順に聞いてまわる。

困っている班には、アドバイスをし、答えを見つけている班には、考えをパワーアップするように促し、考えや取り組みを書いてくださいと画用紙をわたす。これで発表の準備がしだいに整った。

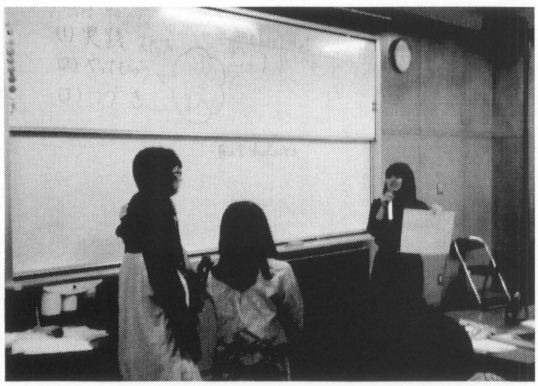
そしてプレゼンの準備。70人の講義なので、ひと班6人で12班つくり、班は席ごとに指定している。いつも同じ人では、個人の成長が乏しいから発表者を指定する。指定するといって「きみが発表してね」では、面白みに欠けるので、「誕生日が今日に一番近い人」など、ランダムに指定し、発言しなかった人がみんなの前に登場することをねらう。さて学生たちは、この後の実践をどのように構想したのだろうか。学生の考えと発表している場面の写真を紹介する。

【写真3－2】

この写真は、カードを見せながら、遊びに変えると発表しているところ。逃げるフックンを捕まえよう、追いかけっこに変えようと提案。爆笑をかう。フックンが逃げるという形で遊ぶなら、それを捕まえる遊びグループをつくるといい、大ヒット！

【写真3－3】

次は、遊んでくれる人を募集する、と発表しているところ。遊んでくれる人を募集しフックンと花いちもんめをして、フックンだけをねらうと発表。これには爆笑をかったが、なるほど、とも思う。



【写真３－４】

写真３－４は、一緒に帰ると発言しているところ。フックンと一緒に帰ってくれる人を探し、帰り道が一人じゃなければ、ふざけは減るのでは、と考えた。的を射ているかも、とうならされた。

こういう発表をさせないで、私がどのように実践を展開したか、一通り話すことで、講義としては成り立つだろう。しかし、それでは自分というものの存在、自分もいずれ実践者になるという意識が生まれない。

私は、あえて共通の土台となる場面設定について丁寧に話した。そして、私が行った子どもとの関わり方の例を説明した。ここに登場する教師の性格や個性を示しておきたかったからだ。これが把握できていれば、この先を想像する方向性は、ある程度決まるはずだと考えた。その流れに乗りながら、自分ならどうするのか、学生に構想してもらおうと考えた。当事者としての自分を育てたいからである。

(5) 自分を語り、自分を開く

この講義の時である。その後の取り組みを全体の前で順番に発表してもらった。するとひとりの学生が、フックンの分析を語りはじめた。

「フックンはさびしいから、ふざけるんだと思う。ふざけて誰かに心配してもらい、叱ってもらいそうやって、関わってもらおうとしていると思う」と、マイクを持って説明した。いつもは、ユーモアを交え、盛り上げ笑いを取ろうとしている彼だった。このあと何を言うのだろう、続きを聞いた。

「おれは、小さい頃からフックンのようにひとりだった。母さんしかいない。母子家庭で育った。ここは笑うところだ。」

(学生たちは、この言葉に意表をつかれ笑う)

「だから、フックンの行動の意味がわかる」

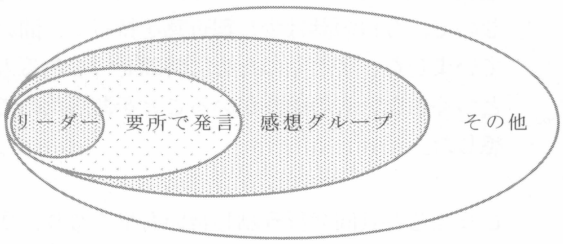
静かな時間が流れた。初めて学生が、みんなの前で、自分を語った場面だった。経験を重ね、書いてきた感想は、これまでもあったが発言は初めてで、聞いた学生たちも彼の発言に驚き感動した。

私は、こういう自分を語ることを望んでいた。それが可能になるには、私と学生、学生と学生、集団の関係性なくしてできない。一定の関係ができてきた証だと発言を聞いて考えた。その関係づくりを進めているのが班である。

彼の発言は、まわりの学生の発言や態度、感想に影響を与えた。ひとつは、自分を出そうと発言する学生が増えたことである。これまで講義をリードし、リーダータイプだと思えた学生は、３、４人だった。それが６人ほどに増え、講義を積極的にリードした。

次に控えめなタイプながら、要所、要所で発言する人たちが登場した。これは、新しい風を吹き込んでくれた。

さらに、おとなしい集団だと思っていたグループが二つに分かれ、感想等で自分を出してくるグループが誕生した。図にすると次のようになる。



【図１　集団の地図】

どのように自分を語り始めたのか、感想をまとめることにする。

(学生の感想)

◆授業のはじめに先生がおっしゃっていた行動の理由がわかれば、叱ることができなくなる、

という言葉がとてもしっくりきました。
このことに気づかなかったら、ずっと子どもの本当の思いに答えられないだろうなと思いました。フックンのための実践として、帰り道を一緒に帰ってもらうだとか、クラスみんなとおもしろい帰り道を探すなど、子どもたちに任せる勇気も必要だと感じました。

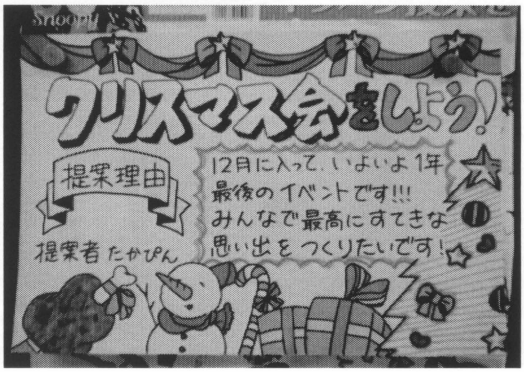
◆自分は地味で存在感がないので、小学生の時は、あまり前に出ない子でした。今回の授業みたいに、朝の会や帰りの会で何かしてほめられた経験もないから、みんなから愛されているフックンが少しうらやましかったです。

◆母一人で子どもを育てることの大変さ、精神的な辛さを知ることができた。父親がいても子育ての理解、協力がないと母も子も傷つくことになることがわかった。私の家庭も父親があまり子育てに協力的ではなかったらしい。17歳の誕生日にそのことで父と母がケンカしているのを見てショックだったことをおぼえている。小学生が見たら、どう感じるだろう…子育ては、まわりのサポートがあってこそできるものだと確信できた。

◆私の母は、個人経営で夜間保育園を経営している。園児の中には、小学生もいたりするそうです。利用しているのは、やはり飲み屋のママさんたちが多く、朝のお迎えの時間になっても、来ない人もいて、ひどい時には、お昼過ぎまで連絡がつかなかったりする親もいるそうです。なので、今日の話は少し親近感を持って、聞いていました。子どものために時間をつくれる人とつくれない人の両方がいることをあらためて感じた。

こうなると共同で行う話し合いも早くなり、次のような案も、10分そこそこでつくりあげるようになった。

資料4　（クリスマス会の原案）



（6）班をかえる、関係をつくる

私は、講義を通して学級づくりをしようと考えた。特別活動という講義を通して、学びの集団をつくろうとした。15回を半年間だと考え、一度の講義で一週間分のつきあいをする。こう考えれば、学級づくりができそうな気がした。すると、4回の講義が終わると、一ヶ月がたつ。小学校なら班がえの時期だ。班のメンバーをかえ、新たな出会いをつくりたい。

4回目の講義が終わる前に、
「次回は、班をかえます。それで班がえのために実行委員を募集します。だれか班がえ実行委員になってみようという人はいませんか？」
募集した。すると、ふたりの学生が立候補してきた。
「それじゃあ、ぼくの研究室で一緒に班をつくろう」
と、日程を調整した。その日、
「どの班も男女混合で、同じ所属の人ばかりにならないようにしてくださいね」
と、条件を提示して任せてみた。ふたりは相談して、リーダーになりそうな人を各班に置き、そのあとはくじ引きをはじめた。そのあと、全体を見直して自分たちの知っている人間関係を確認し、所属の重なりを確かめ、新しい班の席を印刷した。

このプリントを講義の前にドアのところに貼ると学生がやってきて眺めていた。
「なんだか小学校時代を思い出す」とか、「ドキドキして、スリルがある」「どんな人と一緒になるのか、偶然があって楽しい」という声が、聞えてきた。8回目が終わった。同じように
「今度も、班がえ実行委員を募集します」

と、呼びかけた。嬉しいことにひとり増え、3人が立候補してくれた。
「班をつくるときには・・・・」
と、前回と同じ条件を話し、あとをお願いした。任せながら、学生の人間関係や授業の感想、出身地からこの大学を選んだ理由、沖縄のいいところなど、私も参加しておしゃべりをした。
「先生、今度一緒にお昼を食べませんか」
と、突然誘われた。
「ぼくらにとっても、大学の先生とこうやって話すという経験は、とっても貴重です。だからもっと話して、いろいろ聞きたいです」
と、話してくれた。それから毎月1回、一緒にお弁当を食べる日を計画している。

学生とのおしゃべりランチタイムは、学級づくりの休み時間のおしゃべりを思い出させてくれた。こういうおしゃべりは、大事な時間だったなあ、と懐かしく思いながら、講義の時間がフォーマルな班づくりなら、こういう時間は私的な班づくりだなと考えた。ものごとは、公と私を両輪に成り立つのである。

二度目の班がえのことだ。出会いも三回目になると、学生たちも班をかえることに慣れてきた。その分、早く班活動や班の人との関わりになれ、全体を見渡すこともできるようになり、発言が増えた。また、他の班の人が発言していると、
「よし、おれも・・・」
と、競うように張り切りはじめた。張り切りアピールしようとすると、いい面もあるが、過ぎるとよくない。
「あなたの発言は、なかなかいい面もある。しかもおもしろい。でもね、笑わせることも大切だけど、それ以上に大事なことは、相手をうならせることだよ。そういう発言を意識してみてよ。」
と講義の合間や、講義の後に帰ろうとしていた学生の横へ行って、自分の出し方を話しかけた。
すると、次第に学生の方から、
「ちょっと、ブレーキがかからずすみません。」
と言いにやってきた。また、
「今日の発言は、意図から外れていた気がします。すみません。」
と、感想に書かれるようになった。
「発言した中で、あの考えはテーマから、どうかと思う。もう少し修正したほうがいい」
「わたしが子どもの頃は、与えられた係りをそのまま、下請け的にやっていたけど、○○くんの話を聞いて、係りも子どもたちで見直していいとか初めて知った」
など、フロアーの学生も感覚が磨かれた。

班があるからこそ、リーダーが現れ、競い合いながら発言や班の発表が行われるようになった。さらにフロアーの学生も育ち、それが発言者を育てる、リーダーとフロアーのひとつの循環ができてきた。講義をリードする人に対して、
「今日の発言では、私の班のリーダーの発言が一番良かった。実は準備の時から、工夫して張り切っていた。私が先生なら、リーダーに花丸を3つはつけます」
と、学生からの感想が寄せられた。

私はこの感想を手にした時、班を通して共同し学んだからこそ、相手の発言や行動に親密感をもって共感し、得た知識の重要さを認識したのではないかと感じた。班が形式的な話し合いの道具を超えて、ひとつの村を形成しているようだった。

(学生の感想)

◆みんなのアイディアが豊富で、発表を聞いていてあれもいい！これもいい！と思いました。教室がカラフルで、何かの活動を楽しみながらできると、学校へ行くことが楽しみになると思います。9班のモザイクアートが一番気に入りました。1年かけて何かをつくりあげるのは、やっぱり楽しみがあるし、最後まで頑張りぬけると思いました。

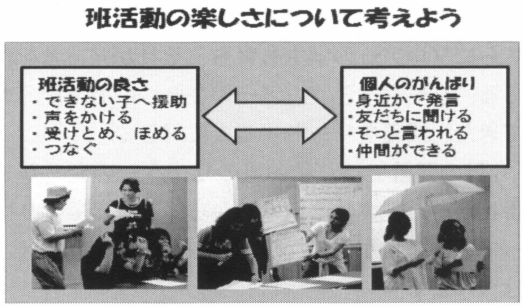
◆班が変わって、新しいスタートの気持ちになりました。席替えみたいでなつかしかったです。

◆介護体験に行って、30分遅刻してしまい、申し訳ありません。どうしても参加したかったのできました。きょうは新しい班で、コミュニケーションもしっかりとれたので、次の講義の班活動もうまくいくと思う。

3　まとめ

班を使い共同的な学びを追究する楽しさや良さを班活動と個人の関係から、次のようにまとめた。

資料５　（班と個人の関係）



さらに学生の姿から、班を活用する良さを次の４点にまとめた。

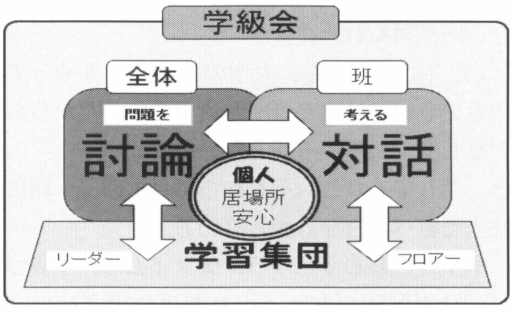
- ●班を講義で使うことで、寝ることができず、参加するようになった
- ●講義に集まった学生も、はじめは群れであり、班を活用することにより人間関係が親密になる。関わるきっかけになる。
- ●人間関係が親密になるにしたがって、発言する人が増え、発言内容や自分の出し方が積極的になった
- ●班の話し合いで、学生が自分の経験を出し交流することでこちらが教えようとしていたことを超える幅の広い学びを得ることができた

中でも、最後に注目してほしい。私が、教えようとしていること以上に、それを超える学びが生まれた。それは各自の経験を交流することで、自分の考えや経験を照らし合わせたからだ。

講義の話すテキストに自分の経験を重ね、さらに他者の発言を重ね合わせた結果だった。はじめは、班を使い、講義に変化をつけ楽しく学んでもらおうと考えスタートした。

しかし、班での交流や全体発表を通した学生たちの感想を毎回読んでいくうちに、ただ楽しいとか変化があるだけではないことが感想や反応からわかった。それは、なぜ生まれたのか。実は班の使い方と人間関係づくりの両面に目をつけ、班を活用したことにあった。班を使い共同的な学びを次の図にまとめました。

資料６　（授業のかたち）



授業は、個人と班と全体とで構成される。そして、学びは班と全体での発表、対話、討論で構成される。最も重要なことは、個人に安心と居場所を保障することである。

お互いの関係性が深まるほどに、こちらが教えようとしていた学びを超え、班での交流と全体の討論を通して、二重の学びをつくることができた。

うまく教えるために、効率的に教えるために班を使うのではなく、学生の経験を引き出し、こちらの教えに彼らの経験であるテキストを重ね、それを出し合い、新たなテキストをつくりだしていくことこそ重要である。そして並行して、班を活用し、安心できる人間関係と居場所をつくり、学びの集団をつくることが新たなテキストづくりを助けるのである。そうすれば、学びの質はより深化し、広がりを見せ、新しい世界を立ち上げてくれるだろう。

＜参考文献＞

1）全生研常任委員会著　学級集団づくり入門 1966 年 明治図書出版
2）全生研常任委員会編　生活指導・集団づくりとは何か　2008 年光栄社出版
3）溝部清彦著　ドタバタ授業を板書で変える　2014 年　高文研出版

4）竹内常一著　竹内常一教育の仕事 1 巻生活指導編
1995 年　青木書店
5）大和久勝・丹野清彦編著　班をつくろう　2014 年
クリエイツかもがわ出版
6）溝部清彦著　子どもをハッとさせる教師の言葉
2008 年高文研出版
7）全国生活指導研究協議会北海道支部編　北海道発「揺れながら子どもと向き合う」 2012 年ひまわり印刷